



かどや通信

第13号

発行日：平成28年5月

発行行：かどや保存会

発行責任者：清水 久行／編集：廣野 克子

「やきめき」に魅せられて！

「人と文化の交流拠点」を目指すかどやでは、毎月四つの教室が開催されている。三年目を迎えた簡単茶道教室とかどや調理倶楽部に加えて、昨年四月に開講した川柳教室と今年一月から始まった小唄教室である。今回は、一周年を迎えた「ときめき川柳教室」の活動を紹介しよう。

《「知人も増えて楽しい！」
脳トレにも一役！》

ときめき川柳教室は、毎月第二水曜日午後一時半から三時半まで、講師の斎藤たみ子さんの指導のもと、メンバー十四人が川柳作りに挑戦している。

教室では、毎回ひとつのお題が宿題として出され、次の会で提出された宿題を無記名で書き出し、全員が好きな句を互選する。斎藤さんが得票数の多い順にコメントし、添削も加えていくというシステムだ。



生け花でも、先生が一枝動かしただけで、見違えるほど素晴らしい作品になることがあるが、川柳も同じ。「先生の添削によって句が生まれ変わるころが、楽しい」という参加者がいるように、斎藤さんが言葉の順や「てにおは」を少し変えるだけで、言葉がにわかには輝きだし、作者が思い描いた情景や心情等が読み側にも伝わるようになるそうだ。メンバーの参加動機は様々だが、「言葉をつぎだすのは苦しいが、教室に来るのがすごく楽しみ」「体調が悪くても、この日だけは頑張っている」「等」と言い、教室は毎回楽しいの雰囲気が漂っている。

一年を振り返り、感想をうかがったところ、「日常生活の変化を川柳にすると、よくなり、常に頭の中に川柳があつて、脳の活性になる」といろいろな

ことに目を向けるようになった」「他の人の思わぬ発想に刺激を受ける」「一つの言葉について、色々な角度から考えるようになった」「知人が増えた」等のコメントが返ってきた。

斎藤さんの勧めで毎日川柳三重同好会に入会した人も多く、毎日新聞の川柳欄にもメンバーの作品がたびたび選出されており、教室の成果が着実に表れてきているようだ。

開講のきっかけは、昨年一月に行われた「思い出を心の詩として」斎藤たみ子 きらめきの川柳展」だった。斎藤さんは、よみうり東海文芸年間賞をはじめ様々な賞を毎年受賞している川柳界のトップスターである。かどやでは、写真や扇、花瓶などに書かれた斎藤さんの作品の数々を展示紹介し、多くの方が見学にいられたが、清水館長の一過性の展示ではもったいないとの思いから、斎藤さんと協議し誕生したのが「ときめき川柳教室」なのだ。

新規参加大歓迎。何気ない日常にあなたならではのときめきが見つかるかも。一度覗きにきませんか？

藤作品が見学者を圧倒！

カゴや人形など、ずらり二百点以上

「グループプラタン 北村恵乃子作品展」と題した藤工芸展が、四月一日から五月八日まで開催された。

伊勢市在住の北村さんが主宰する藤工芸サークル「グループプラタン」は、約十五年の歴史があり、今回は同グループのうち二十四人が出展した。

日本では「籐(とう)」と呼ばれているラタンは、東南アジアを中心に熱帯雨林地域のジャングルに自生するヤシ科の植物だ。通常の木材よりも丈夫で折れにくく水に浸すと柔らかくなる特性があり、曲線の加工もしやすいため、用途は多岐に亘る。



北村さんは「軽くて丈夫な籐は、普段の生活に使うことで真価を發揮します。生活に密着し

た作品作りを心がけています」と話す。その言葉どおりカゴや

テーブル、椅子、額縁バッグ、人形等からモダンなインテリアまで、す

ぐにでも使いたくなるような作品二十種類以上二百点余りが所狭しと展示され、見学者を圧倒した。

《体験教室で小物入れ作り》

「籐の小物入れを作ろう」という体験教室が四月十七日に実施され、十一名が参加した。

時間は、午後一時から四時までだ



ったが、三時間で作品を完成させるのは難しいとのこと。当日はグループプラタンから四人が助手として参加者の支援を行った。

通常、体験教室では「これこうすんの?」「あれ、これでよかったんかいなあ」「ええかんじやなあ」等参加者達の会話が飛び交い、にぎやかなのだが、なぜか当会はほとんど私語がなく真剣そのもの。会場は「しーん」とした静けさが支配しており、三時間があったと言う間に過ぎたようだ。時間は多少オーバーしたが、作品は満足いくものだったようで、終了時には「楽しかったわ。また、こつという教室やってえな」等と、こやかな会話が広がった。

出来上がった作品は、北村さんが持ち帰り、ラッカーを塗って、後日かどやに届けられた。



熟女の手習い

爆弾発言が出たのは、二月の小唄教室でのことだった。「五月の屋下がりコンサートでお披露目しましょう!」と、某氏はなんの屈託もなくこう言い放ったのだ。だが、師匠を含め他の弟子たちも、この大胆な提案にはめまいを覚えたに違いない。それもそのはず、小唄教室は一月に始まったばかりで、三味線のにぎり方すらおぼつかない頃の発言だったのである。しかも弟子五人は全員団塊の世代。「四十の手習い」から遅れることはなはだしく、小唄は習っても、人前で演奏するなどとは思いませんでした。

しかし、「年齢なんぞ関係なし。上達するには練習あるのみ!しかし、漫然と練習していても進歩はおぼつかない。目標があれば練習にも身が入るに違いないのだあ!」と、某氏は考えたのだ。その迫力に押し切られ、五月のデビューが決定した。

教室は月二回だが、この無謀な提案によって、教室のない週末もかどやで自主練習をすることになり、始めたばかりとは思えない猛特訓に次ぐ猛特訓が続いた。その結果、本番では大きなミスもなく、初演を乗り切った。練習は辛い時もあるが、そんな努力の積み重ねが得も言われぬ達成感を導いてくれると実感しただろう。

小唄に限らず、川柳しかり、藤工芸しかり。打ち込むものを見つけて挑戦する人は、いくつになっても輝いている。「もう年やから」なんて尻込みせず、何かに挑戦してみませんか?楽しい世界が広がりますよ。

いろいろなジャンルの音色が響く

GWの屋下がりコンサート

かどやでは今年のゴールデンウイークも、フォークにお箏、小唄とジャンルの異なるコンサートを行った。

「昭和なフォークにうつつと」



昭和の四月二十日(四月二十九日)には、「愛風・風薫るコンサート」と題して、かどや初出場のフ

ォークグループ「愛風」と、かどやは四度目の「AOUOA(あわー)のコンサート」が行われ、三十四名が参加した。
愛風は、松阪や伊勢を中心に活動する五人グループで、フォーク仲間

のあわーの声かけで今回のコンサートが実現した。

愛風は、「二十二才の別れ」「神田川」「愛燦」等、昭和のメロディを中心に演奏。参加者は、女性ボーカルの澄みきった歌声にうつつと、懐かしい曲の数々に時には共に口ずさんでいた。

今回は一人で参加したAOUOAは、お馴染みのフォークに加えて、伊勢志摩サミットの関連イベントの為に急ぎょ練習したというピートルズナンバーも披露した。
今回は、伊勢市や志摩市から両グループのファンも駆けつけてくれて、会場は大いに盛り上がった。
「箏の音がしっとり」と

「そよ風は、箏の調べに乗って」が五月三日に開催され、三十八名が参加し、箏の音色を楽しんだ。

演奏は、昨年も艶やかな箏の音を聞かせてくれた生田流宮城会ことみ会の皆さんだ。十三弦の箏に加えて民謡やわらべ歌をアレンジした「ことうた」に始まり、「祇園小唄」「船頭小唄」などなつかしのメ



びやかに演奏してくれた。

今では聴く機会も少なくなった邦楽だが、新緑がまぶしい庭を目にしながら古民家で聴く箏の音は格別で、参加者は和のひとときを満喫していた。

「小粋な小唄にほっこり」

五月四日には、「春も小唄で」と題したコンサートが行われ、二十一名が参加した。

出演は、昨年十一月の

かどや屋下がりコンサートの小粋な演奏で会場を魅了し、小唄を知らなかった人たちにもその素晴らしさを大アピールした土筆栄紀衛さん



んと、栄紀衛さんの演奏にいたく感動し、弟子入りしたつくしんぼの皆さん。そして、このところ出番がないため機会を狙っていたかどや専属の前座バンド・かどやゼンザースの三組だ。



まずは、ゼンザースが小唄とは関係ないが、同じ弦楽器のウクレレとギターで、フォークやジャズ、五月にちなんだ「こいのぼり」や「背くらべ」等の唱歌を演奏した。

続いて、つくしんぼのお披露目として「やぐらさくら」「お伊勢参り」「梅は咲いたか」の三曲を演奏し、最後に栄紀衛さんが「夜桜」「つんつらつん」「雨の四季」等六曲を



艶やかに演奏し、小唄の魅力存分にアピールした。

へへ鳥羽商船学校の生みの親

近藤真琴の偉業を学ぶ



第三十回か

どや塾は「鳥羽偉人伝・近藤真琴」と題して、鳥羽商

船高等専門学校の前身を創設した近藤真琴について、同校の卒業生でもある塩野明俊さんが講演。同校の卒業生や歴史に関心の深い市民等二十六名が熱心に耳を傾けた。

鳥羽藩士であった近藤真琴は、文久三年（一八六三年）に江戸の鳥羽藩中屋敷の自宅に蘭学塾のちの攻玉塾を創設した。攻玉塾は当時、東京で最も有力な塾として、福沢諭吉が創設した慶應塾と共に名を馳せた。また、海軍兵学校等で後人の育成にも貢献し、福沢諭吉や新島襄等とともに、明治の六大教育者と称された。日本の航海術・測量術の基礎を確立し、明治期の躍進的な急成長の一翼を担った等、近藤真琴の輝かしい業績を分かりやすく紹介した。

また、同校の元教官・水野逸夫さんは在職当時から近藤真琴を研究しており、遺品等を通して、塩野さんとは異なる切り口で、近藤真琴のエピソードを紹介した。

なお、鳥羽商船学校は、攻玉社の分校として明治十四年に創設されたが、明治十九年に近藤真琴が五十四歳の若さで急逝したことにより、明治二十六年に閉鎖された。しかし存続を望む地元の人々の支援によって明治二十八年には東海商船学校として再興され、同三十二年には鳥羽町立商船学校となった。この再興に尽力し筆頭の支援者となったのがかどやの八代目廣野藤右衛門であったことも、塩野さんが付け加えてくれた。



◆◆◆貸部屋の案内◆◆◆

かどやを有効にご活用いただくこと、一部の部屋を貸部屋として貸し出しています。茶話会や勉強会、展示会などにご活用ください。詳細は、かどやへ。電話〇五九九―二五八六八六

時間区分 部屋	午前	午後	全日	冷暖房設 備利用料
	10時～12時	13時～16時	10時～16時	
座敷南(10畳)	500円	600円	1,000円	500円
座敷北(8畳)	400円	500円	900円	—
仏間(6畳)	300円	400円	700円	—

- ・営利目的の場合は、料金表の10割増しとなります。
- ・鳥羽市民または市内勤務者以外の利用は、料金表の5割増しとなります。
- ・許可された使用時間を超過する場合は、割増料金が発生します。
- ・冷暖房費は、全日使用の場合は2倍になります。

かどや保存会 平成28年度会員募集中!

かどや保存会は、歴史的文化財である「鳥羽大庄屋かどや」の保存ならびに効果的な活用・運営をめざして活動を続けており、当会を支援してくださる会員を募集しています。お陰さまで27年度には、301名の方々に会員登録いただきました。今年度も4月25日現在で、すでに220名の方が登録していただきましたが、さらにこの和を広げたいと思います。登録がまだの方は、是非ご支援くださいませよう、よろしくお願い申し上げます。

本年度(H28/4/1～H29/3/31)の年会費(2,000円)は、継続・新規を問わず、以下の方法で納入ください。(1)手渡し：かどやにお越しいただき、直接事務局にお支払いいただく。

- (2)銀行振込：郵便局 普通 かどや保存会 00850-4-151751
百五銀行 普通 かどや保存会 801-460713